昭和二十年代の想い出

辰野清隆
昭和21年北見中学卒

昭和も遠くになりにけり。敗戦から講和発効の20年から28年まで占領下における無茶苦茶な時代を振返り、その生殺与奪の中で生きて来た様を申上げたいと思う。

勿論裁判権もなく、本当に米軍に殺されても、殺され損であった。占領軍の軍政官は、殆んどが左翼主義者で社会主義を日本に植付けようとした。

誰も気づきにくい巧妙な言論管理で、先の戦争は「全て日本が悪かった」との言論・教育は今日までも影響をを与えております。しかし突然、38度線を越え攻撃してきた朝鮮動乱でスターリンと共産主義者の恐さを知り、それまで大手を振るっていた共産主義の国会議員、公務員をレットパージという事で、いっぺんに首（共産党員16,000名）を切った。

本格的な極東に於ける東西冷戦の始まりである。

旧円封鎖（預金は最低限の生活費以外一切おろせない）。すさまじいインフレ下で円の貨幣価値は1／1500になっていた。

戦前一万円有ると金利で食える、10円あれば一日遊べると言っていたが「たばこ」一個も買えなくなった大インフレであった。米、麦、豆等雑穀は勿論、諸、南瓜、その他口に入る物は総て統制で、醤油、味噌、塩、たばこ、酒類、野菜、魚、しかもそれが遅配、欠配でとにかくどうして生きて来たのか不思議であった。さらに住宅は、未だ防空壕すまいも多く、ガス燃料は薪の配給が時に有る様子、東京への転入は「学生と進駐軍用員以外は、転入は許されない」ドッジライン、シャウプ勧告で徹底的に日本経済は、一転して大デフレになっておりました。

お話をすれば今の人には全く通じない事だが、私の北見を出る頃を具体的に書いていずれ又、じっくりと御話をする機会が有ると思います。

21年3月北見中学（北斗のことは戦時中4年制で、4年卒業でも5年卒業でも

よかった）22年3月北見駅を午前9時に出発した。東京へ行くなどは死にに行く様なものだと父は玄関までも送ってくれなかった。母は握り飯を何食分か作ってくれた。

将に死に行く様な事は充分判っていた。しかし青春は二度と無い。青雲の志やみがたく、遂に飛び出してしまった。時に私は17才であった。汽車の切符（中々買えない）をようやく手に入れた。小樽から先は猛吹雪で、除雪がうまく行かないらしくて、「胆振線」に入ったが、途中の峠を昇り切れず何度かバックをして、勢いを付けて昇るが遂にダウン、何時間後にあと押しの機関車が来て、やっと峠を越え、伊達紋別を経由で函館に着いたのは夕方であった。

北見より33時間、そこで乗船名簿を手に入れる。ＤＤＴを全身にぶっかけられ、青いスタンプを手首に押され、翌日の昼過ぎに乗船（連絡線は全部沈められた）それで千トンにも満たない「天風丸」と言う貨物船のござの上で寝る。何時間かかけて青森へ。翌日9時に出るたった一本だけの東京行きで、しかも各駅停車に寒い中を待った。

列車の中は、便所、洗面所、網棚の上に、全く恐ろしい様な混みようで身動きも満足に出来ない状態で、9時より24時間を掛けて、それでも上野に着いた。食料は一切売っていない、母の握り飯も既に無くなり、全く飲まず食わずであったが、但一念東京へ行くのだと、腹の空いたのも、忘れていた。

列車の烏は、杉板が貼ってあり残るガラス窓から、三河島あたり、高架からでしょうか、その眺めは一望千里の焼野原で、昔の国技館だけがポツンと建っていた。（焼けた跡を米軍が修理しメモリアルホールとした。後の日大講堂である）

東京への転入は進駐軍用員か学生だけである。東工大専攻科建築科に入学した。

角帽で色々学生さんと言う事で何かに付け助かった。板倉先生の所にアルバイトに伺った縁で、現代建築界の大先生の所に25年、卒業と同時に入所以後、有名建築に関連させて頂き32才独立して事務所を構え、多くの懸賞にも当選し、又大建築や住宅（池波正太郎邸）等生涯二六〇の建築設計を創った。

戦後の様々な事は、又何かの機会に・・・・。